

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 75 (4) は, Review Article が 1 本, Regular Article が 2 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

Review Article

Does cognitive behavioral therapy for anxiety disorders assist the discontinuation of benzodiazepines among patients with anxiety disorders? A systematic review and meta-analysis

*M. Takeshima**, *T. Otsubo*, *D. Funada*, *M. Murakami*, *T. Usami*, *Y. Maeda*, *T. Yamamoto*, *T. Matsumoto*, *T. Shimane*, *Y. Aoki*, *T. Otowa*, *M. Tani*, *G. Yamanaka*, *Y. Sakai*, *T. Muraio*, *K. Inada*, *H. Yamada*, *T. Kikuchi*, *T. Sasaki*, *N. Watanabe*, *K. Mishima* and *Y. Takaesu*

*Department of Neuropsychiatry, Akita University Graduate School of Medicine, Akita, Japan

認知行動療法は不安症患者のベンゾジアゼピン系薬剤の中止を補助するか? : システマティックレビューとメタ解析

不安症の治療において, 長期にわたるベンゾジアゼピン系薬剤の使用は推奨されない。認知行動療法は不安症患者のベンゾジアゼピン系薬剤中止に有効な治療選択肢の 1 つである。このシステマティックレビューとメタ解析は, 認知行動療法が不安症患者のベンゾジアゼピン系抗不安薬中止に有効であるかどうかを明らかにするために行われた。本研究は PROSPERO に事前登録された(登録番号: CRD42019125263)。2018 年 12 月に主要な電子データベースの文献検索を実施した。3 つの無作為化比較試験がこのレビューに含まれ, メタ解析が行われた。ベンゾジアゼピン系抗不安薬を中止した患者の割合は, 認知行動療法+漸減法併用群のほうが漸減法単独群よりも短期(割り付

け3ヵ月以内; NNT: 3.2, 95% CI: 2.1~7.1, risk ratio: 1.96, 95% CI: 1.29~2.98, $P=0.002$) および長期(割り付け6~12ヵ月後; NNT: 2.8, 95% CI: 1.9~5.3, risk ratio: 2.16, 95% CI: 1.41~3.32, $P=0.0004$) ともに有意に高かった。認知行動療法は短期だけではなく長期にもベンゾジアゼピン系抗不安薬の中止に有効な可能性がある。不安症患者における認知行動療法のベンゾジアゼピン系抗不安薬中止の有効性と安全性に関して決定的な結論を導き出すためには, より大きなサンプルサイズの研究が必要である。

Regular Article

Performance on the Wechsler Adult Intelligence Scale (WAIS) in Japanese patients with bipolar and major depressive disorders in euthymic and depressed states

*J. Matsuo**, *H. Hori*, *I. Ishida*, *M. Hiraishi*, *M. Ota*, *S. Hidese*, *Y. Yomogida* and *H. Kunugi*

*Department of Mental Disorder Research, National Institute of Neuroscience, National Center of Neurology and Psychiatry, Tokyo, Japan

日本人双極性障害・大うつ病性障害患者のうつ病相期と寛解期におけるウェクスラー成人知能検査(WAIS)成績

【目的】本研究の目的は, 双極性障害患者の認知機能を, 病相期で層別化して大うつ病性障害の患者および健常者と比較することである。【方法】対象は, ウェクスラー成人知能検査(WAIS)修正版もしくは第3版を受検した双極性障害患者139名(寛解55名, うつ状態84名), 大うつ病性障害患者311名(寛解88名, うつ状態223名)と, 健常者386名。病前推定IQが90以上の非高齢者を, 年齢, 性別, 病前IQが群間に偏りが

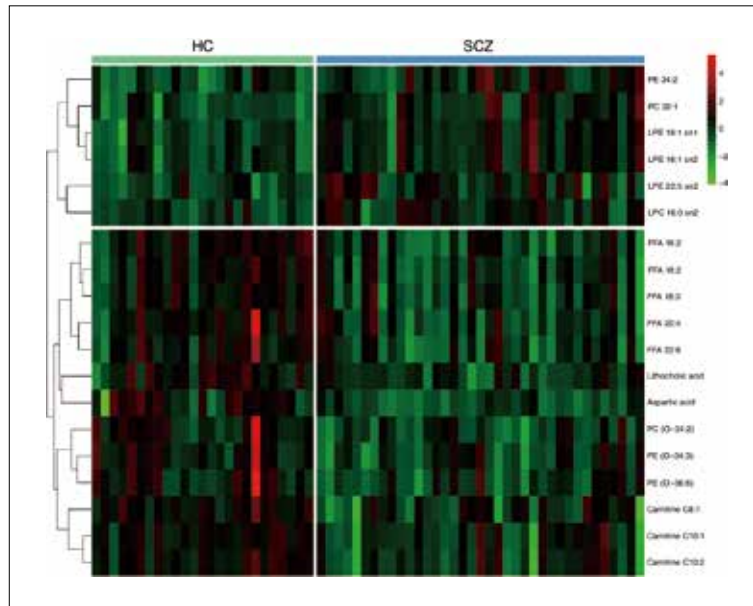


Figure 1 Heat map of 19 differential metabolites with FDR < 0.05.
(出典：同論文, p.141)

ないように揃えた。【結果】双極性障害によるうつ状態群は、健常群と比べ、言語性IQ、動作性IQ、全IQ、および知覚統合、作業記憶、処理速度の3つの群指数が有意に低く（すべて $P < 0.001$ ）、大うつ病性障害によるうつ状態群と比べても、全IQと作業記憶が有意に低かった。大うつ病性障害によるうつ状態群は、健常群と比べ、動作性IQ（ $P < 0.001$ ）、全IQと処理速度（ $P < 0.001$ ）のみが有意に低かった。寛解群では、健常群と比べ、双極性障害寛解群は動作性IQが有意に低く（ $P = 0.004$ ）、大うつ病性障害寛解群は処理速度のみが有意に低かった（ $P = 0.030$ ）。【結論】WAISで評価すると、大うつ病性障害の患者は処理速度のみ低下がみられるのに対し、双極性障害の患者はうつ状態において広範かつ大きく認知機能が低下している。両群とも寛解状態では認知機能障害の程度は軽減するが残存する。

Regular Article

Alteration of lipids and amino acids in plasma distinguish schizophrenia patients from controls : A targeted metabolomics study

Y. Liu*, X. Song, X. Liu, J. Pu, S. Gui, S. Xu, L. Tian, X. Zhong, L. Zhao, H. Wang, L. Liu, G. Xu and P. Xie

*1. NHC Key Laboratory of Diagnosis and Treatment on Brain Functional Diseases, The First Affiliated Hospital of Chongqing Medical University, Chongqing, 2. Key Laboratory of Psychoseomadsy, Stomatological Hospital of Chongqing Medical University, Chongqing, China

血漿中の脂質およびアミノ酸の変化による統合失調症患者と対照との識別：標的メタボロミクス研究

【背景】統合失調症（schizophrenia : SCZ）は重篤な精神障害である。代謝物異常は、統合失調症患者における重要な病原因子である。本研究では、標的メタボロミクスにより、SCZのバイオマーカーとなる血漿中の脂質およびアミノ酸を同定することを目的とする。【方法】SCZ患者76名、および条件をマッチさせた対照50名から血漿を採取し、液体クロマトグラフィー質量分析法（Liquid Chromatography/Mass Spectrometry : LC/MS）に基づく多重反応モニタリング（MRM）を用いたメタボロミクス分析を実施した。22種類のアミノ酸と160種類の脂質

または脂質関連の代謝物からなる計 182 種類の標的代謝物について検査した。二項ロジスティック回帰分析を行い、脂質およびアミノ酸のバイオマーカーにより SCZ 患者と対照とを識別することが可能か否かを判定した。受信者動作特性(receiver operating characteristic: ROC) 曲線の曲線下面積 (area under the curve: AUC) の分析を実施し、バイオマーカー項目の診断能力について評価した。【結果】SCZ 患者と対照との間で有意差を示した代謝物 (偽発見率 0.05 未満) として、アミノ酸 1 種類、

脂質または脂質関連の代謝物 18 種類からなる 19 種類が同定された。二項ロジスティック回帰分析により選択した項目の診断能力は、薬剤未投与群 (AUC=0.936) と全 SCZ 患者群 (AUC=0.948) において良好で、特に薬剤投与群 (AUC=0.963) において優れていた。【結論】SCZ では血漿中の脂質およびアミノ酸に有意な調節異常が認められ、これにより、SCZ 患者と対照とを効率的に識別できた。LC/MS/MS に基づく方法により、客観的な SCZ 診断のための信頼性の高いデータが得られる。

PCN 誌 Impact Factor 大躍進のお知らせ

2020年度のImpact Factorが発表となり、Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) 誌のImpact Factorは昨年度の3.351から大きく躍進し、5.188となりました！

今年は、Impact Factor 計算方法の変更により全体的に値が上昇しているのですが、Psychiatry 分野におけるランキングをみても、PCNは昨年の155誌中52位から156誌中33位と上昇しております。6年前の2014年には1.634だったことを考えると、大成長を遂げたといえます(図参照)。ひとえに、会員の先生方の積極的なご投稿と引用、Field Editorの先生方や査読者の先生方のご尽力の結晶と心より感謝申し上げます。今後も弛みない努力を続け、世界のトップレベルをめざし、精神医学の発展に貢献していきたいと考えております。

また、PCN 誌のImpact Factorが上昇し、採択基準も少しずつ厳しくなるなか、会員の先生方がもっと気軽に投稿できる新たな雑誌を作ったほうがよいというニーズを受け、来年度から、PCNの姉妹誌でOpen Access Journalの“Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports (PCN Reports)”を創刊することといたしました。創刊から2年ほどは、会員の先生が著者の場合(筆頭著者またはCorresponding Authorが会員の場合)は、論文掲載料(Article Publication Charge: APC)を当学会全額負担といたしますので、積極的にご投稿をいただければ幸いです。

今後とも、PCN 誌とその姉妹誌である新雑誌PCN Reportsをよろしくお願い申し上げます。

PCN 編集委員会委員長・PCN Editors-in-Chief 神庭重信, 加藤忠史

